

私の生まれた頃の東京郊外の風景に読む 日本の花産業史

田中桃三

私の生まれたのは東京府品川区だが目黒不動尊の近くにあり、家の前の道を隔てたところが旧林業試験場（現在林試の森となっている）であった。

私の生まれた昭和10年頃は、東京の郊外として発展を始め、東急の目蒲線、東横線も開通し沿線の住宅地にも急速に家が建ち始め、落ち着いた頃であった。この話は、私が生まれた頃から、20年後、大学に在学中ぐらいまでのことをまとめてみた。

その間社会の変化はいうまでもなく大変なもので、太平洋戦争の勃発、終戦と揺れ続けた。私たち子どもは7～8歳までは比較的平穏な暮らしであったが、その後は疎開、戦災、食料難などが立て続けにやってきて、転居だけでも10年間に5～6回、転校も3回経験している。

小学校（当時は国民学校といった）入学前後頃はおっぱい家の前の林試で一日を過ごしていた。林試は点在する研究室を各種の木が取り囲んでいたから、カブトムシやクワガタもたくさんいたし、遊ぶことに不自由はなかった。

家から子どもの足で歩いていけるとところに目黒不動尊があったが、その境内で遊ぶのも日課であった。

不動尊では毎月28日が縁日で、露店が多く出てにぎわっており、家族に連れられて夜店を見て歩くのは楽しかった。そのなかに植木屋がいたことは今でも記憶している。木の台の上にマツ、モミジ、キク、ホオズキ、アサガオなど、季節の鉢植えをならべて売っていた。ちょうど広重の浮世絵にあるような風景が残っていたのである。

もっともこの時代、園芸店もガーデンセンターもない



玉川温泉村の今。バス停に名が残る

頃であるから、鉢植えを手に入れるにはこのようなところで買うより他はなかったのである。

その時、私は8歳ぐらいであったが、一回の縁日の小遣いは50銭（0.5円）なのでさすがに鉢植えは買えなかった。だがどうしてもほしくなり、数ヶ月小遣いをためてようやくモミジの鉢植えを買った。5号鉢程度だったと記憶しているが、大切に育てていたのに、2年後の空襲で家ともどもすべて灰になってしまった。

もともこのあたりから多摩川下流の河川敷にかけては野菜、果樹など園芸が盛んな地域で、花も栽培されていた。

関東大震災（大正12年）以後、電車が敷かれ、郊外の新興住宅地として急速に開発が進んでいた。震災後10数年たったその頃は、駅を中心にした、洗足、田園調布、成城などの住宅地が落ち着きはじめ、その周りの畑では野菜作りがおこなわれており、温床による野菜の促成栽培や室（むろ）を利用した枝物の開花調整なども行われていた。



とどろきバラ園（野村和子氏提供）

玉川温室村

最寄の駅から郊外電車で10～15分で田園調布、多摩川園（現在多摩川駅）に着くが、多摩川園駅には遊園地があった。そこでは菊人形展なども秋になると開催され、結構にぎわっていた。

駅前から5分ほど歩けば多摩川で、上流に向かって歩きはじめると急に展望が開けて土手の右側にはそのころ珍しいガラス温室が点在していた。現在は温室は1軒もないが、バス停に玉川温室村の名が残っている。

私は4～5歳頃から、父に連れられ多摩川園から二子玉川までの約4キロをピクニックするのであったが、年に2～3回は行っていた。そしてたまには何箇所かの温室へ寄ったのであるが、どこのお宅か記憶にない。後で父が撮影した写真を見る（今回探してみたがついに発見できず）と、犬塚卓一氏のカーネーション温室を訪れていたようである。また家族で一面がチューリップの畑の中を歩いている写真もあった。あとで伊藤東一氏の元従業員の方にうかがったが、戦前売れ残った球根を土手の向こう側に大量に植えたことがあったそうで、たまたまそれを見たのかもしれない。

この温室村は、先ほどのカーネーションの犬塚氏をはじめ、最盛期には30名以上の園芸家が集まり、温室総面積1万5千坪に及ぶ洋花の生産地であった。

私が見たのは、犬塚氏がアメリカより戻られて温室を作られてから15～16年経っており、このあと数年で太平洋戦争により壊滅的な状態になるまでのもったよいときを見ていたのかもしれない。

温室村の発案は森田喜平氏の発案であったそうで、

森田二項園はカーネーション、洋蘭などを栽培されていた。森田氏のバラ栽培は戦前の一時期、東京の需要の主要部分を占めていてほどであった。

また先ほど話しの出た伊藤東一氏は、園芸学部卒業だが、外国産の園芸植物の導入紹介と品種改良、日本での栽培法の確立など、多方面にわたって活躍された人で、昭和初期の花弁園芸界にとって忘れられない人であろう。特にハナショウブについては多くの新品種を作出され、他にもキク、ダリヤ、スイセン、グラジオラスなどの新品種の作出もされている。

そのほか、荒木石次郎氏は温室村の草分けの一人で、スイトピー、カーネーションなどの切花栽培をされていた。

昭和10年代の園芸事情

以上は私の幼時の記憶に、当時のことを調べられた湯尾敬治氏の著書によるところが多いのであるが、ついでに、その本にしたがって、昭和10年代の世田谷区、大田区、川崎市北部の園芸事情を紹介してみよう。なお、温室村は大部分が大田区であり、一部が世田谷区になっている。

温室村から多摩川を背中にまっすぐ歩き、8間道路（現在環状8号道路）を横断し、大井町線の線路を渡ると、当時できたばかりの「とどろきバラ園」があった。わずか150坪のバラ園であるが、園主は後年バラのブリーダーとして世界に知られるようになった鈴木省三氏であった。

彼は太平洋戦争中もバラの栽培をやめることなく守り通したのであるが、昭和34年京成バラ園に移るまで、数多くの名花を作出したところである。

この場所は世田谷区奥沢町だが、隣町には早川源蔵氏がいた。私は昭和20年代の初期、早川さんの近所に住んでいたことがあるので、何度かお屋敷に伺ったことがあるが、広大な庭に寒蘭、君子蘭、山草類、盆栽など、たくさんの鉢植えがあったことを記憶している。早川氏は大正から昭和初期にかけてのこの地区の園芸関係者の指導的な方で、世田谷花卉園芸組合、大日本園芸組合などの設立にも深くかかわり、玉川温室村の開村にも主導的な役割をされているのである。

多摩川の温室村より上流になるが、下野毛に桜井元氏がおられた。桜井氏は栽培家でもあり、研究者でもあったので、欧米よりの種子の導入増殖などを通じて

園芸界に貢献された。著書もあり、戦後は原種の保護に情熱をそそいでおられた。

二子玉川を越え、砦には小杉喜四郎氏がいた。小杉清先生の父君である。小杉家は目黒柿の木坂の名家であり、当初は目黒で栽培を始められたのであったが、昭和13年、この砦に温室を建設したのである。敷地2900坪、温室820坪で、バラ、カーネーション、ユリなどを栽培されていた。現在でもこの近在の老人に小杉先生の話をすると、「あの砦の温室屋さん」との答えが返ってくるほど、知られた存在であった。

この他にも、たくさんの方々がこの地におられたが、周囲の大田区馬込区はバラ、カーネーションの温室栽培がさかんであり、戦後もキク、ユリの切花栽培の名人が競っていた。また多摩川を渡った川崎地区も、戦前から戦後にかけて、さらに今にいたるまで、パンジーなどの苗生産、シクラメンの鉢物、花桃などの枝物の産地として盛んであった。

都立園芸高校

この城南地区の園芸が盛んになった理由はもちろん大消費地の近郊であったこと、土地が水田に適さず江戸時代から野菜の産地として盛んであったことなどがあるが、明治41年創立された都(府)立園芸学校と、数年後に開設された三井戸越農園を忘れることはできない。

都立園芸高校は戦前は全国から生徒を募集し、優秀な教員のもと数多くの園芸人を育てあげた。特に花卉の石川保太郎先生は50年の長いあいだを勤められ、特に小菊や江戸菊の栽培保存に力を入れられ、数多くの新品種を作出されており、懸崖菊の見事さは類を見な

い出来であった。

先ほどのべた鈴木省三氏、早川源蔵氏、小杉清先生などもそうである。

三井戸越農園は三井財閥が設立したものである。当初は営利目的ではなかったが、昭和9年用賀に移転し、洋蘭やユリなどの営利栽培を始めた。ここで育った人々には、森田氏をはじめ、初期の温室村の建設に力のあった方々も多い。昭和20年代後半だと思うが園芸学部の先輩である清水基夫先生が園長のとき、高校生の私が伺って、いろいろ教えていただいた覚えがある。

ここまで、私の記憶と2、3の参考書によって書いてまいりましたが、なにせ70年近く前のことですので記憶違いなどで、間違いやご迷惑をおかけした内容もあるかも知れませんが、その点をご容赦願います。



都立園芸高校正門のイチョウ並木道は昭和のはじめからという

	<h3>植物分類表</h3> <p>大場秀章 編著 B6並装 538頁(予定) 定価3,500円(税込)</p> <p>分子生物学的知見にもとづく最新の植物分類体系を日本で初めて紹介。日本産自生種、主要な帰化種や栽培種など、約2400属12000種余を470科に分類。リンネに始まる植物分類体系変遷の詳細な歴史を、主要分類表とともに附す。索引項目数23700余。</p>	<h3>日本の帰化植物図譜</h3> <p>日本植物園倶楽部 編 大場秀章 監修・解説 A4上装 352頁(内カラー200頁) 定価9,800円(税込)</p> <p>海を越えて渡来・野生化した、最も身近な植物を精緻なボタニカルアートで紹介。収録種200。帰化植物研究の歩みを附す。</p>	<h3>サクラ図譜</h3> <p>川崎智也 編 / 大場秀章 編 B4上装 224頁(内カラー64頁) 定価25,000円(税込)</p> <p>第一級のサクラ研究者だった故著者の未完表彩色画・精密な図解全90点、および記載文を収録。詳細な注釈と解説を附す。</p>
<p>株式会社アポック社 e-mail info@apoc.co.jp http://www.apoc.co.jp/ 〒247-0056 鎌倉市大船2-14-13 Tel. 0467-45-5119 / FAX 0467-45-6591</p>			